８　関東地方の鬼瓦

髙橋　香

Ａ　はじめに

坂東諸国については、相模国・武蔵国・常陸国・上野国・下野国の５か国の遺跡においてこれまでに確認されている。下野国・常陸国・相模国などでは蓮華文鬼板が出土し、畿内で展開する様相と類似している。鬼面文については東海道沿いと東山道沿いでは異なる文様意匠のまとまりが見出され、鬼瓦のルーツがそれぞれ異なることが予測される。また、型押の鬼瓦から手づくねの鬼瓦まで多種多様な鬼瓦が展開しており、坂東の中でも複数系統の鬼瓦の伝播ルートがあるようである。まずは各国の事例紹介をした後、坂東で展開する鬼瓦の様相について若干の考察を述べていきたい。

Ｂ　各県の事例について

ⅰ　武蔵国

①東京都

東京都の事例は武蔵国分僧寺跡、武蔵国分尼寺跡の２遺跡から出土している（第１・２図）。

武蔵国分僧寺跡　東京都国分寺市に所在する。武蔵国分僧寺から出土した鬼瓦については有吉氏が３型式に分類している（有吉 1986）。

［A 型式］両手を頭上に掲げ、怒った姿を表現、ユーモラスな獣面文。型作り。

［B 型式］周縁に珠文帯を配し、肉厚で立体的な面相をしている。手づくね。

［C 型式］逆立った巻き毛、吊り上がった眉、鋭く伸びる牙で表現されている。周縁は凸型の周帯で型抜き後にヘラによる調整を施す。型作り。

A 型式は、金堂、僧尼寺中間地域から、B 型式は中門、東僧坊、区画溝から、C 型式は金堂、中門および南辺区画溝などから出土している。うち、226 次調査（南辺区画溝）から出土している鬼瓦は新沼窯と同笵と判断される。C 型式の鬼瓦については、相模国・千代廃寺との同笵関係にあるタイプと、新沼窯のタイプと２種がみられる。

武蔵国分尼寺跡　東京都国分寺市に所在する。国分僧寺分類のＢ型式が尼坊周辺で出土している。

②埼玉県

埼玉県の事例は、新沼窯、中堀遺跡、大寺廃寺の３遺跡から出土している（第３図）。

新沼窯　埼玉県比企郡鳩山町に所在する。武蔵国分僧寺跡の創建期の生産地としてしられる。新沼窯から出土している鬼瓦は１種である。逆立った巻き毛で、吊り上がった眉、鋭くのびる牙で表現され、周縁は凸型の周帯である。鼻から眉間にかけての表現が、武蔵国分僧寺跡で出土している千代廃寺と同笵の鬼瓦とは異なる。型づくりで、粘土板を重ねている接合痕跡がみられる。そのため、接合痕で剥離している事例が顕著である。抉りの部分はいくつか種類がみられることから、葺く場所をあらかじめ想定されていた可能性が高い。

中堀遺跡　埼玉県児玉郡上里町に所在する。９世紀後半から 10 世紀代の集落遺跡である。出土した鬼瓦は立体的な手づくねの鬼瓦である。巻き毛を表現しているのだろうか、斜めにあがる凸状の意匠で、全体的に薄い作りである。軒丸瓦は、上野国で展開する一本づくりの単弁四弁蓮華文軒丸瓦が伴う。群馬県所在の黒熊中西遺跡などでみられるような軒丸瓦と鬼瓦の様相と類似する。

大寺廃寺　埼玉県入間郡日高市に所在する。宿谷川で結界された丘陵上に立地する山林寺院とされる。近隣には女影廃寺があり、出土する軒丸瓦のうち、平城宮式 6225 型式が出土している。鬼瓦は２種類出土している。ともに手づくねによるもので、第３図７は、目をアーモンド状に切り抜き、眉の表現を沈線で表している。鼻の孔は上をむいた状態で中央に貼り付けている。鬼瓦裏面と側面の全体に縄叩きを施す調整である。第３図８は円形の瞳で、高く突出している。鼻部分と一部歯の表現が確認されるが、全容は不明である。報告書では、８世紀後半にあたると推定している。

ii　相模国

神奈川県の事例は、宗元寺跡、千代廃寺、下寺尾廃寺、相模国分僧寺跡、相模国分尼寺跡の５遺跡から出土している（第４～７図）。

宗元寺跡　神奈川県横須賀市に所在する。相模国内で最初に創建された古代寺院とされる。鬼瓦は蓮華文と鬼面文の２種が確認されており、いずれも採集資料である（國平 2010）。Ⅰ類は蓮華文である。凸型の素弁が表現され、周縁は欠損しているが凸帯がめぐると想定される。型作りで、粘土板を重ねたとみられる接合痕跡がみられる。Ⅱ類は鬼面文である。小片であることから全体像は不明であるが、鼻の皺部分、巻き毛の部分に相当するものと考えられる。型作りで、粘土板を重ねたとみられる接合痕跡がみられる。胎土からみて、石井瓦窯（石井遺跡）の胎土と類似していることから三浦半島内の窯で生産されたことが想定される。

千代廃寺　神奈川県小田原市に所在する。千代中学校埋め立ての為の土取りから採集されたものと、1958 年の発掘調査で出土した鬼瓦４点がみられる。土取りから採集された鬼瓦

は、逆立った巻き毛、吊り上がった眉、鋭くのびる牙で表現され、周縁は凸型の周帯である。下顎、下歯がなく抉りにはめ込む丸瓦を咬むような表情になるが、上の歯の下から下方向へむかって巻き毛が表現されている。型押しで、粘土板を重ねたとみられる接合痕跡が確認される。笵を抜いた後、文様部分をヘラのような工具で調整している痕跡がみられ、丁寧なつくりであることがわかる。裏面は丁寧なナデ調整である。武蔵国分僧寺跡の資料と同笵資料とされており、笵傷の進行具合から千代廃寺から武蔵国分寺へ笵型が移動したとされている（内田 1983)。その他の３点の鬼瓦については、小片の為、全体像が不明であるが、２は１と文様構成が異なる鬼面で、同様に脚の部分が残る。３は土取りで採集された鬼瓦の脚の部分、４は、裏面の把り手部分が残存する。２・３は笵型による成形で、４は手づくねである。

下寺尾廃寺　神奈川県茅ケ崎市に所在する。高座郡家に隣接する古代寺院跡で、伽藍を区画する溝と隣接する集落から出土している。鬼瓦は、眉間部分と抉りの部分が出土している。逆立った巻き毛や鋭くのびる牙の表現で、周縁は凸型の周帯である。眉間の中心にイチョウ型の凸型が表現されており、この部分と鼻の２か所に釘穴が穿たれている。型押しで、粘土板を重ねたとみられる接合痕跡がみられる。裏面はナデ調整で整えている。目の表現は、笵から抜いた後、平坦にした後、瞳の表現であろうか指頭で押印するものとそのまま凸型のものの２種がみられる。抉りの部分は下歯のない状態で、上歯のみが表現されており、抉りにはめ込む丸瓦を咬むような表情になる。集落から出土した鬼瓦（第６図３）の裏面にはヘラ記号が確認される。

下寺尾廃寺から出土した鬼瓦は、相模国分僧寺跡・尼寺跡の再建期と呼ばれる時期に出土している鬼瓦と同笵である。軒丸瓦も再建期の軒丸瓦が出土しており、点数は少ないが、国分寺との関係性が強い寺院と考えられる。

相模国分僧寺跡、尼寺跡　神奈川県海老名市に所在する。鬼瓦は創建期と再建期の２種が確認されている（國平 1990)。いずれも鬼面文で、逆立った巻き毛や吊り上がった眉、鋭くのびる牙の表現であり、周縁は凸型の周帯である。創建期とされる鬼瓦は目の表現が楕円状の凸型の目の中に黒目が表現され、また巻き毛の表現がより緻密である。上歯と下向きの牙は確認されるが、その下は欠損している為不明である。鼻の表現は楕円状の凸型が三段で表現され立体的である。型押しで、粘土板をあわせた接合痕跡が確認される。鬼瓦の裏面は縄叩きを施している。再建期とされる鬼瓦は、眉間部分、目から鼻部分、左下端が確認されている。眉間部分は上向きの巻き毛部分に笵傷が確認される様相は下寺尾廃寺出土事例と同様である。型押しで、粘土板をあわせた接合痕跡が確認されている。裏面は丁寧なナデ調整である。相模国分僧寺の創建瓦窯は横須賀市に所在する乗越瓦窯であるが、創建期の鬼瓦の胎土は乗越瓦窯で生産された瓦とは異なることに注目される。

iii　常陸国

茨城県の事例は、諏訪廃寺、根方遺跡、上野原瓦窯、新治廃寺跡、長者屋敷遺跡の５遺跡から出土している（第８図）。

諏訪廃寺　茨城県稲敷郡阿見町に所在する古代寺院である。資料は採集資料である。表面は縄叩きを斜格子状に押圧したものである。裏面は布目痕跡がそのまま残る。抉りに相当する部分はヘラ削り等で調整している。

根方遺跡　茨城県稲敷郡阿見町に所在する。諏訪廃寺に隣接する集落で、諏訪廃寺と同様な組成の瓦が出土している。図化している鬼瓦は、諏訪廃寺事例であげているものと同様に縄叩きを斜格子状に押圧したものである。裏面は布目を残しており、粘土板を複数枚重ねて成形している。脚部の抉りは１ヶ所の横長半円形で輪部には笵型の痕跡がみられないため抉り部は施文後にくりぬいて成形している。（小屋 2023）報告書の中では、鬼瓦が出土している遺構や根方遺跡の時期について８世紀初頭ないしは８世紀前葉と判断されており、鬼面文がはいる前段階の鬼瓦である可能性を指摘している（寺内ほか 2011）が、近年遺構の廃絶時期について再検討され、７世紀末以前の可能性も指摘されている（及川 2023）。

上野原瓦窯　茨城県桜川市に所在する。新治廃寺の東方約 800m に位置する窯跡である。新治廃寺跡の所有瓦窯の１つで創建期から補修期にかけて中心となった平窯である。出土した鬼瓦は蓮華文で、正方形を呈し、内区は単弁十六葉、外区は鋸歯文で外周周縁には平行叩きが施される。型作りによるもので新治廃寺跡創建期の軒丸瓦の文様意匠と類似する。

新治廃寺跡　茨城県筑西市久地楽に所存する。東南約 500m には新治郡家が所在し、廃寺西側には窯跡である久地楽長町遺跡がある。鬼瓦は、金堂に相当する西側の畑から出土した。上野原瓦窯と同じ文様構成で、鋸歯文様の単弁十六葉である。

長者屋敷遺跡　茨城県常陸太田市菜谷に所在する。周辺は古代遺構・遺物が散見するところで、菜谷廃寺跡や大里廃寺跡と称された地域である。かねてより炭化米や瓦が採集され久慈郡家推定地とされる遺跡である。鬼瓦は２点確認され、これまでみてきた鬼瓦の文様意匠とは少し異なる。形状は円頭方形を呈し、周縁は幅約３cm 程度の凸帯をめぐらしている。鬼面の意匠は立体的なつくりで、眉間部分には円形の突起から 17 本の線が上方に延びている。眉間は一本で表現され、眉間からも上方向に線が延びている。目や鼻は立体的な表現で前面に突出している。周縁部や裏面はヘラナデ調整の後部分的にナデ調整で仕上げている。文様意匠で考えると、日本的ではなくむしろ大陸的な表現である。同様に出土している塼が高句麗でみられる文様意匠に類似していることからも、大陸からの影響を直接うけた鬼瓦として考えられる。

iv　下野国

栃木県の事例は、大内廃寺、下野薬師寺跡、下野国分寺僧跡、下野国分尼寺跡、山王遺跡、下野国府跡、大慈寺、畳岡遺跡、般若廃寺、ゼニゴ沢窯跡、イドの沢窯跡、街谷窯跡、

鶴舞窯跡、東山窯跡、安楽寺、赤城神社境内遺跡、東光寺裏山窯跡の17遺跡から出土している。ここでは主たる鬼瓦の種類が出土している遺跡についてふれる（第９図）。

下野薬師寺跡　栃木県下野市に所在する。鬼瓦は蓮華文と鬼面文の２種が出土している。蓮華文鬼瓦は県内では唯一とされる。内区に素弁八葉蓮華文、外区に面違鋸歯文を巡らしている。下半には浅い抉りが確認される。裏面には粘土を押し詰める際の指頭痕の凹凸があり、その上からヘラ削りやナデ調整を施している。固定装置の痕跡は確認されていない。製作技法については瓦笵と枷型を用いるとしている。瓦笵のアーチにあわせて枷型となる板を「八」の字に組んだとみられ、最頂部で縦方位に粘土がはみ出した痕跡が凸線として確認される（勝見 2004）蓮華文の他には鬼面文が３種確認され、下野国分寺鬼瓦１～３型式に相当する。外区に連朱文帯がめぐり、下顎と下歯のない鬼面である。上歯の下にはわずかに巻き毛の表現があるものが古く（第９図：鬼瓦１型式）、ないもの（鬼瓦２・３型式）が新しいとしている。製作技法は、粘土塊を詰めているようで文様面に粘土の接合痕跡が明瞭に残るものがある。固定装置は鼻の下に釘穴が打たれている。

下野国分僧寺跡、尼寺跡　栃木県下野市に所在する。下野国分僧寺跡、尼寺跡ともに鬼面文がみられる。外区に連珠文帯がめぐり、下顎と下歯のない立体的な鬼面で、瓦笵の違いから１・２・３の３型式に分類され、すべて鬼面のみの表現である。１型式（第９図）は笵傷の進行によってさらにA、B、Cの３段階に分類される。栃木県内の鬼瓦の基準資料となっている。

般若廃寺　栃木県佐野市に所在する。鬼瓦はやや縦長で、外区は連珠文帯、内区は巻髪の表現があまりない鬼瓦である。下顎と歯のない状態で、牙の表現と歯の表現に差があまりない。下野国分僧寺跡・鬼瓦３型式が変化したものと考えられる。全体が確認されるのは唯一である。

東光寺裏山窯跡　栃木県足利市に所在する。粘土板状のものに刻んだ鬼瓦である。鼻は後に貼り付けたもので、固定装置は裏面に把手状のものがついている。県内においては他に類例はない。

ｖ　上野国

群馬県の事例は、山王廃寺、上植木廃寺、上野国分寺、上野国分尼寺、鹿ノ川瓦窯、山際瓦窯、黒熊中西遺跡、綿貫廃寺の８遺跡から出土している（第10・11図）。

山王廃寺　群馬県前橋市に所在する初期寺院である。鬼瓦は素文、鬼面文の２種が出土しており、鬼面文は型押しと手づくねの鬼瓦が確認されている。

素文の鬼瓦は、外面は縦位のハケ目調整、裏面は横方向の指ナデ調整が確認される。鳥衾の架かりが頂部に刻み込まれており、降り棟用の鬼瓦として考えられている。固定装置などは確認されていない。産地は、秋間の八重巻瓦窯が想定され、上野国の中で最も古い鬼瓦と考えられている。

鬼面文のうち、型作りの鬼瓦は、狭い素文帯の内側に２本の界線に囲まれた連珠文帯があり、内側は鬼面が表現されている。抉り部分の直上に、下向きの顎髭が確認される。素文縁と連珠文帯の界線の間、連珠文帯と鬼面を囲う界線の間には溝が浅く棒状工具などでさらに深くなぞられている。瓦笵の種類は２種が想定されている。

手づくねの鬼瓦は、平坦な板状のものに目や鼻、眉など細い粘土紐を貼り付けたものと想定される。裏面側にはハケ状の調整痕跡が残る。また、裏面には棟に留めるために棒状の穴が抉られた痕跡が確認されている。

上野国分僧寺跡、尼寺跡　群馬県前橋市・高崎市に所在する。僧寺は鬼面文が主であるが、尼寺からは素文の鬼瓦も出土している。

鬼面文は、Ａ～Ｅの５種に分類され、うち型押しがＡ～Ｃの３種、手づくねがＤ・Ｅの２種が確認されている。型押しの鬼瓦は、凸帯の周縁の内側は界線で区画された中に珠文帯を配し、その内側に唐草文があり鬼面がみられる。下顎、下歯はなく上歯のみで、上歯の下からは顎髭が抉りにむかって伸びているＡとＢの違いは裏面の調整で、Ａ種には布目痕跡が残り、Ｂ種はナデ調整で消している。Ｃ種は大型品に想定されており、ＡやＢ種より厚みもある。文様は凹凸部分を除いてヘラで描き、また連珠文部分も珠文の周囲をヘラで描いている。

手づくねの鬼瓦は、Ｄ種は文様全面に指ナデの痕跡が残る。裏面はナデ調整を施すものもあるが、砂粒が顕著なものもあり離れ砂を使用しながら製作していると考えられる。Ｅ種はヘラで密に沈線をいれて文様を描くもので、裏面はナデ調整が顕著にみられる。

黒熊中西遺跡　群馬県吉井町に所在する。標高 200m ほどの丘陵部に位置する山林寺院と考えられる遺跡である。鬼瓦は手づくねで立体的である。粘土板状に棒状にした粘土を貼り付け巻髪や眉を表現している。目の部分は円筒状に飛びだたせ、一見ユーモラスな表情である。下歯・下顎が表現されており、抉り部分は半円系のものと長方形を呈するものの２種が確認される。共伴する軒丸瓦は簡略された単弁四弁蓮華文軒丸瓦で、１本づくりである。

Ｃ　坂東で展開する鬼瓦について

各県の鬼瓦について概観したが、大きく３タイプに分類可能である。

一つは鬼瓦が使われるようになった段階は、蓮華文鬼瓦を使用していることがあげられる。蓮華文鬼瓦が出土している寺院は、地域の核となる寺院にみられるようで、下野薬師寺跡では７世紀後半としている。創建瓦は川原寺式との関係性を強くもつ瓦として捉えられており、面違鋸歯文をもつなど軒丸瓦との共通要素は多い。新治廃寺跡も軒丸瓦は面違鋸歯文ではないが、同様な文様意匠を採用した意匠である。軒丸瓦の意匠と異なるのは、宗元寺跡の類例で、軒丸瓦はパルメットと蓮蕾文を交互に配する素弁の蓮弁である。畿内

や東北でみられるような複数の蓮華を配置する鬼瓦はみられず、蓮華文は単独の意匠を採用している。

鬼面文に関しては、型押しの鬼瓦は東山道と東海道沿いで類型化される。東山道沿いに該当する下野国、上野国では、外区に珠文帯を配し、内区に鬼面を配するものが展開する。珠文帯と鬼面の間には唐草状の文様がみられるもの、みられないもの、がある。抉りの部分はすべて下歯・下顎のないもので丸瓦を噛むような表情になっていることは共通する。下野国では下野国分寺の鬼瓦が国内に展開し、上野国では、上野国分寺とは類するが同笵ではない鬼瓦の２種が国内に展開する。笵種は下野国では３種、上野国では５種が確認される。同笵関係については国を超えないが、双方の影響はうけたものと判断される。

一方、東海道沿いに展開する鬼面文については、外区部分はなく凸状の周縁の内側には鬼面紋が配される。下歯・下顎のないもので丸瓦を噛む表情になっているのは東山道沿いに展開する鬼面文と共通する。東山道沿いに展開する鬼面紋よりはバリエーションが少なく、種類としては４種である。また、相模国と武蔵国では国を超えた同笵関係がみられることも特徴といえる。

それぞれのモチーフとなった鬼面文は、畿内で展開していた鬼瓦の影響を少なからずも受けていたと考えられる。全国に展開する鬼面文は「平城宮式」「南都七大寺式」に分類され、九州を中心に「大宰府式」と呼ばれる鬼瓦が展開する。外区に珠文帯を配する意匠は「南都七大寺式」に、外区はなく鬼面文を配するのは「平城宮式」に該当する。つまり、東山道沿いでは「南都七大寺式」が、東海道沿いには「平城宮式」の鬼瓦が展開していたのであろう。平城宮式鬼瓦をみると、鬼面の口部分で上歯と下歯が表現されているもの（Ⅱ・Ⅲ式）と上歯のみが表現されているもの（Ⅳ・Ⅴ式）に分かれるが、坂東に展開する鬼瓦は上歯のみが表現されているものが多い。また、東山道・東海道で展開する鬼瓦はともに上歯の下から巻髪が表現されているものが古いとされ、上歯の下の巻髪がないものが新しいとされるが、平城宮式や南都七大寺式には上歯から巻髪が表現されているものはみられない。しいていうならば平城宮式のⅢ式に下歯の下から巻髪が表現されてはいるが、これをモチーフにしたとするにはいいきれない。坂東で展開する鬼の文様意匠は、畿内の文様を踏襲しつつも共通する文様意匠が展開していたことがいえよう。

同じ鬼面文でも、常陸国では独自の展開をみせる。国内ではみられない大陸的な要素のある鬼瓦が突如みられるのである。鬼瓦の他、塼等も出土しており分布については要検討である。

Ｄ　国を超える鬼瓦―千代廃寺と武蔵国分寺事例―

東山道沿いの鬼面紋鬼瓦は、国を超えることはなく国内でそれぞれ展開したが、東海道沿いの鬼面文鬼瓦については国を超えての同笵関係がみられる事は先に述べている。笵傷

の進行状況からみて、郡寺から国分寺へと笵が移動した、との見解があり他国にはみられない事例として紹介されている。しかし、千代廃寺の鬼瓦は採集資料でいまだ１点のみの事例であることからその検証は難しい。鬼瓦の表面をよくみると瓦笵から抜き取った後、輪郭をより浮きだたせる為か、文様にそってヘラのような工具を用いた調整が観察される。となると調整によって笵傷などを消されてしまうと前後関係の判断基準となる部分が不明瞭になってしまうことも考えらえる。検討資料が増えた後に再検討が必要であろう。

製作技法については、千代廃寺例も武蔵国分僧寺例も同様のつくりをしている。粘土板を重ね合わせたもので、裏面は、笵を押し込む為の指頭痕が明瞭に残る。武蔵国分僧寺事例には２種の鬼瓦があり、一つは新沼窯のもの、もう一つは南多摩窯と想定されている。千代廃寺の鬼瓦がどこで焼成されていたのかが鍵となるが、胎土からみると千代廃寺の創建瓦を焼成していたからさわ瓦窯の胎土とは少し異なる為、鬼瓦は別の瓦窯で生産していた可能性が高い。

相模の瓦生産体制は、武蔵国に依拠する体制であったと考えられるが、国分寺瓦窯の一つである南多摩瓦窯群は、相模国・武蔵国の分水嶺に位置しており、武蔵国側に位置しながら相模国分尼寺の瓦生産をしていた瓦尾根瓦窯や、相模国側に位置しながら武蔵国分寺の瓦生産をしていたセイカチクボ瓦窯があるなど入り組んだ状況である。千代廃寺は鬼瓦の他に、時期は新しくなるが武蔵国でみられる素弁蓮華文軒丸瓦が出土するなど武蔵国と非常に関係が強い。背景に何があるのか今後も検討を重ねたい。

E　おわりに

最後に簡単にまとめると、坂東諸国で展開する鬼瓦は、蓮華文鬼瓦が下野国を初現として７世紀後半頃に導入、少し遅れて上野国では無文の鬼板が、常陸では縄目を押圧する鬼板がみられる。８世紀段階になると鬼面文が導入され、最初は型押しのものが展開する。東山道沿いには南都七大寺式が、東海道沿いには平城宮式の鬼瓦が展開し、各国で波及していく様がみられる。独自の展開がみられるのが常陸国で、鬼面文に関していえば大陸との直接の関係が考えられる。９世紀後半頃から10世紀代には上野国・下野国・武蔵国を中心に手づくねの鬼瓦が展開していく。この手づくねの鬼瓦が後に中世鬼瓦へとつながるのかは、また別途検討が必要であろう。

（かながわ考古学財団）

謝　辞

本文作成にあたり、押方みはる、大橋泰夫、大村浩司、加藤大二郎、剣持輝久、田中里奈、手島芙美子、昼間孝志、中平　薫、中道　誠、中三川昇、宮原正樹、依田亮一（敬称略）にお世話になりました。資料集作成に関しては出浦 崇氏（群馬）、茂木克美氏（栃木）、新垣清貴・齋藤達也（茨城）に作成していただきました。記して感謝申し上げます。

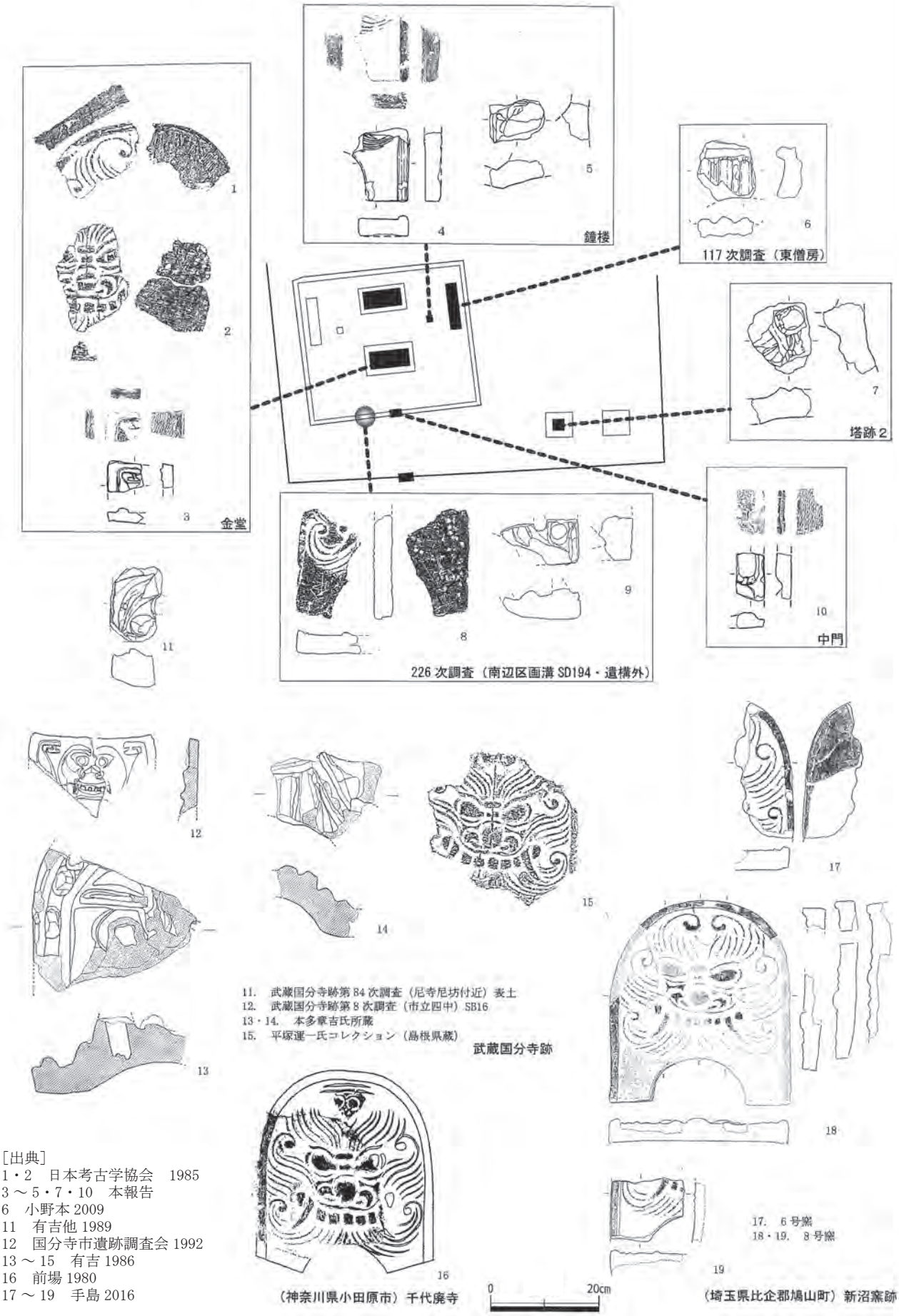
参考文献

赤星忠直博士文化財資料館 2001『古代寺院　宗元寺』
有吉重吉 1986「第四章第四節 遺瓦からみた武蔵国分寺」『国分寺市史　上巻』国分寺市
茨城県考古学協会 2023『瓦から読み解く古代社会の諸相－基礎資料の集成と分析－』
岩戸晶子 2001「奈良時代の鬼面文恩威瓦：瓦葺技術からみた平城宮式鬼瓦・南都七大寺式鬼瓦の変遷」『史林』84-3　京都大学
茨城県立歴史館 1994『茨城県における古代瓦の研究』学術調査報告書 4
内田盛雄昭 1983「千代台廃寺鬼瓦は武蔵国分寺出土鬼瓦より先につくられていた」『小田原史談』第 112 号小田原史談会
内田盛雄 1984「千代台廃寺鬼瓦について」『鎌倉』45　鎌倉文化研究会
海老名市 1998『海老名市史』 1 資料編 原始・古代
及川謙作 2023「下君山廃寺の瓦と古代の信太郡」『婆良岐考古』第 45 号　婆良岐考古同人会
大川　清 2006『住田正一蒐集古瓦図録』交通研究協会
大橋泰夫 1997「第Ⅱ章 第 5 節（1）鬼瓦」『下野国分寺跡 XI』栃木県教委育委員会
岡田茂弘 1967「相模国分寺を掘る」『古美術』18　三彩社
岡田茂弘 1967「相模国分寺を掘る」『古美術』18　三彩社
小田原市教育委員会 2017『千代寺院跡文化財調査報告書』小田原市文化財調査報告書第 128 集
勝見一晶・中道　誠ほか 2004「（５）鬼瓦」『史跡下野薬師寺跡Ⅰ－史跡整備にともなう調査－』栃木県南河内町教育員会・国士館大学文化区部考古学研究室
川崎市民ミュージアム 2003『郡の役所と寺院 古代を考えるⅠ』川崎市民ミュージアム
川又清明 2012「信太郡諏訪廃寺跡の瓦」『茨城県立歴史館報』第 39 号　茨城県立歴史館
河野一也 1993「奈良時代寺院成立の一端について（N）－相模国足下郡千代廃寺の古瓦を中心として－」『神奈川考古』第 29 号　神奈川考古同人会
國平健三 1990「初期相模国府の所在地について－造瓦技法の比較と分布からみた場合－」『えびなの歴史』創刊号　海老名市
國平健三 2002「相模国分寺と地方寺院の研究」『神奈川県立歴史博物館総合研究報告総合研究－さがみの国と都の文化交流』神奈川県立歴史博物館
國平健三 2010「相模国における古代寺院の展開 - 宗元寺跡の忍冬交飾蓮花文軒丸瓦の系譜と年代をめぐって -」『神奈川地域史研究』第 27 号　神奈川地域史研究会
栗原和彦ほか 2012「山王廃寺一平成 22 年度調査報告 別冊 続瓦整理から一」前橋市教育委員
島根県教育庁古代文化センターほか 2011『平塚運一古代瓦コレクション資料集（２）武蔵国分寺関連宇瓦・鐙瓦補遺 平塚運一コレクション資料目録』島根県古代文化センター調査研究報告書 44
高橋　香 2013「6 瓦」『神奈川県茅ケ崎市下寺尾官街遺跡群の調査～下寺尾七堂伽藍跡・高座郡街の調査』茅ヶ崎市埋蔵文化財調査報告 40　茅ヶ崎市教委育委員会
滝澤　亮・林原利明ほか 1990『相模国分寺関連遺跡１－尼寺址の調査（1989 ～ 90 年度）』海老名市教育委員会相模国分寺遺跡調査会
小田原市教育委員会 2017『千代寺院跡文化財調査報告書』小田原市文化財調査報告書第 128 集
田中広明・末木啓介 1997『中堀遺跡 御陣場川堤調節池関係埋蔵文化財発掘報告』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 190 集　財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
手島芙美子 2016『新沼窯跡 第１～４次調査報告書』鳩山町埋蔵文化財調査報告 44　鳩山町教育委員会
寺内久永・関　絵美 2011『根方遺跡 主要地方道竜ヶ崎阿見線バイパス建設事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』茨城県教育財団文化財調査報告第 345 集　財団法人茨城県教育財団
日本考古学協会 1989『武蔵国分寺跡遺物整理報告書－昭和 31・33 年度－』日本考古学協会仏教遺跡調査特別委員会編
日高町教育委員会 1995『宮久保遺跡・上の条遺跡・大寺廃寺跡』

前澤和之ほか 1988「史跡上野国分寺跡」群馬県教育委員会
山本忠尚 1998『日本の美術　鬼瓦』391　至文堂
依田亮一ほか 2018『国指定史跡武蔵国分僧寺跡発掘調査報告書Ⅱ－史跡保存に整備事業に伴う事前遺構確認調査－［遺物編］』国分寺市遺跡調査会・国分寺市教育委員会
依田亮一・高橋　香ほか 2010『小出川河川改修関連遺跡群Ⅲ茅ヶ崎市七堂伽藍跡（２）小出川河川改修事業に伴う調査』かながわ考古学財団調査報告 251　公益財団法人かながわ考古学財団

図版出典

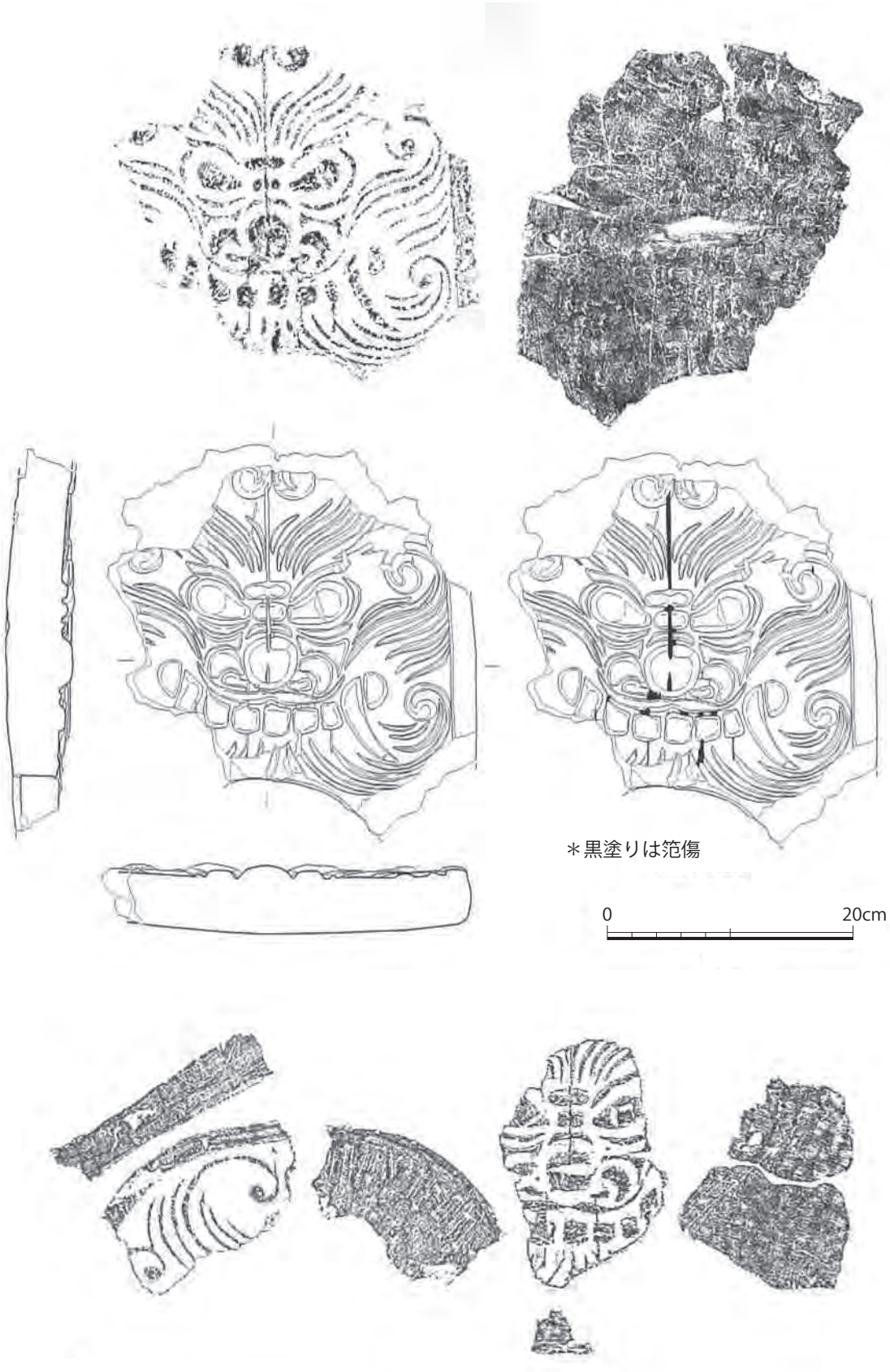
第１図：依田ほか 2018。
第２図：日本考古学協会 1989。島根県教育庁古代文化センターほか 2011。
第３図：手島 2016。田中ほか 1997。日高町教育委員会 1985。
第４図：國平 2010。
第５図：河野 1993。２～４の写真は筆者撮影。※小田原市教育委員会所蔵。
第６図：大村ほか 2013。依田ほか 2010。１の写真は筆者撮影。※茅ヶ崎市教育委員会所蔵。
第７図：海老名市 1988。大川 2006。滝澤ほか 1990。
第８図：川又 2012。寺内 2011。茨城県立歴史館 1994。川崎市民ミュージアム 2003。
第９図：茂木氏作成。
第 10 図：　栗原ほか 2012。
第 11 図：前澤ほか 1988。



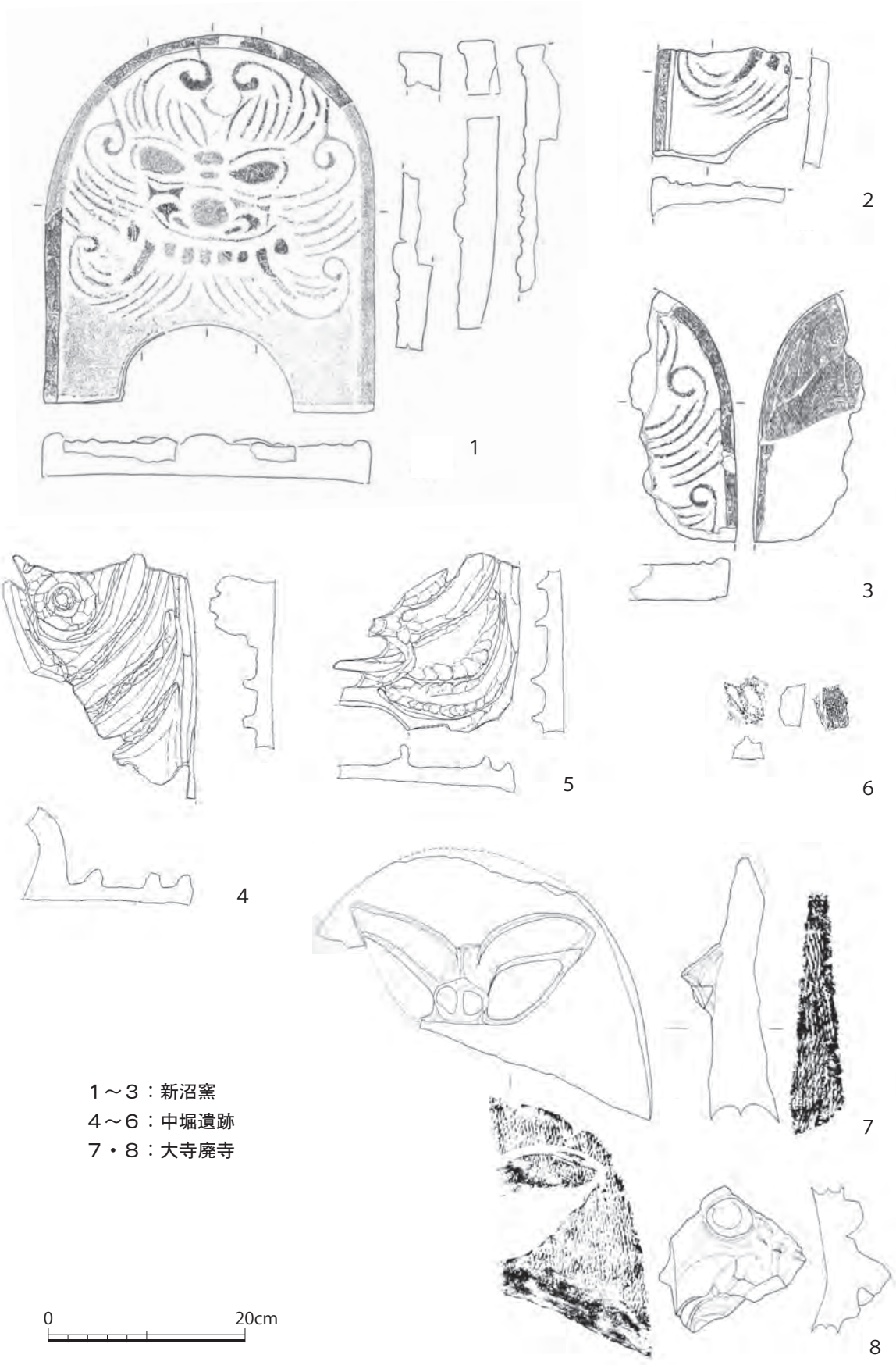
11.　武蔵国分寺跡第 84 次調査（尼寺尼坊付近）表土
12.　武蔵国分寺跡第 8 次調査（市立四中）SB16
13・14.　本多章吉氏所蔵
15.　平塚運一氏コレクション（島根県蔵）
17.　6 号窯
18・19.　8 号窯

［出典］
1・2　日本考古学協会　1985
3 ～ 5・7・10　本報告
6　小野本 2009
11　有吉他 1989
12　国分寺市遺跡調査会 1992
13 ～ 15　有吉 1986
16　前場 1980
17 ～ 19　手島 2016

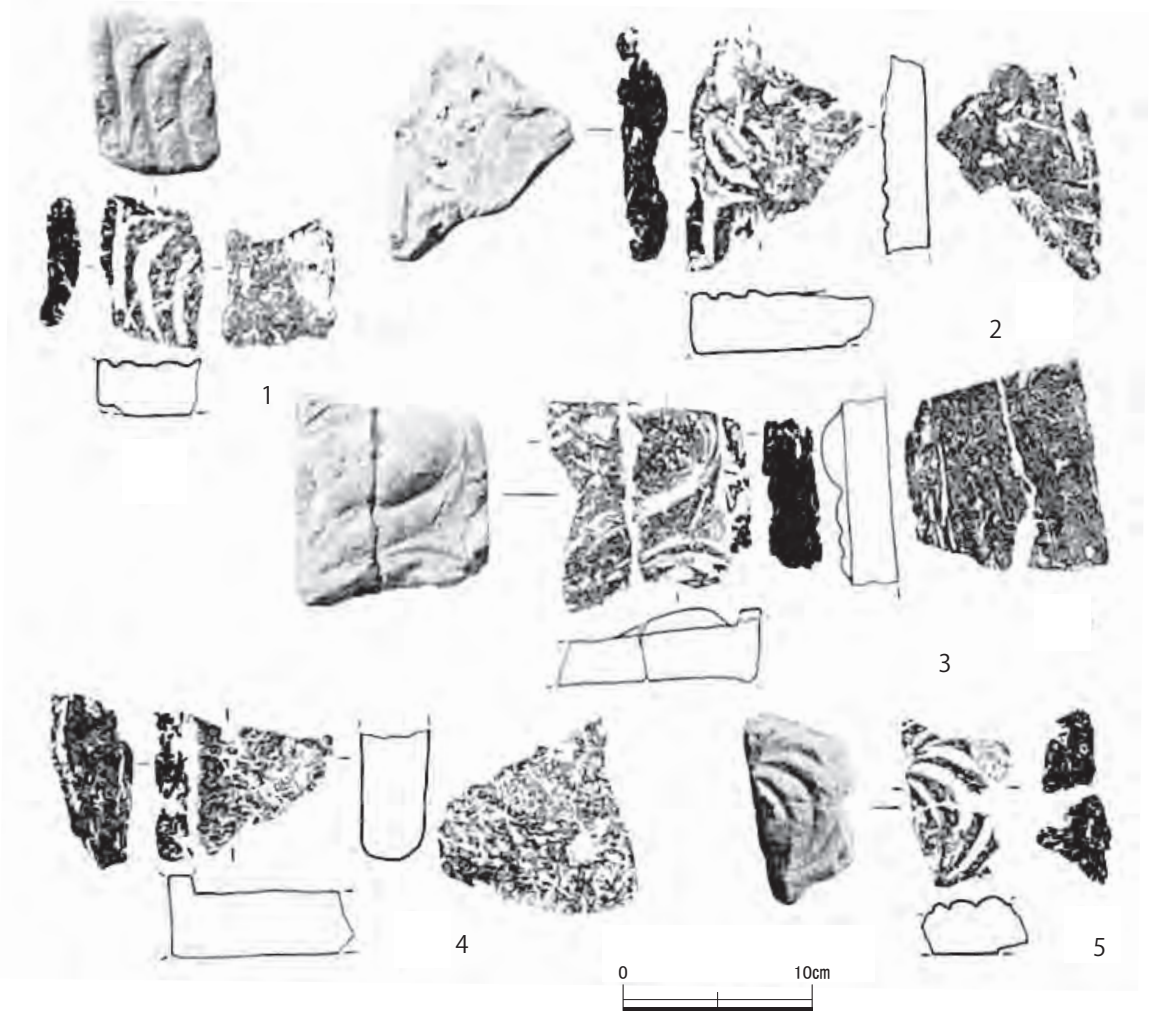
第 1 図　武蔵国分寺出土鬼瓦（1：10）



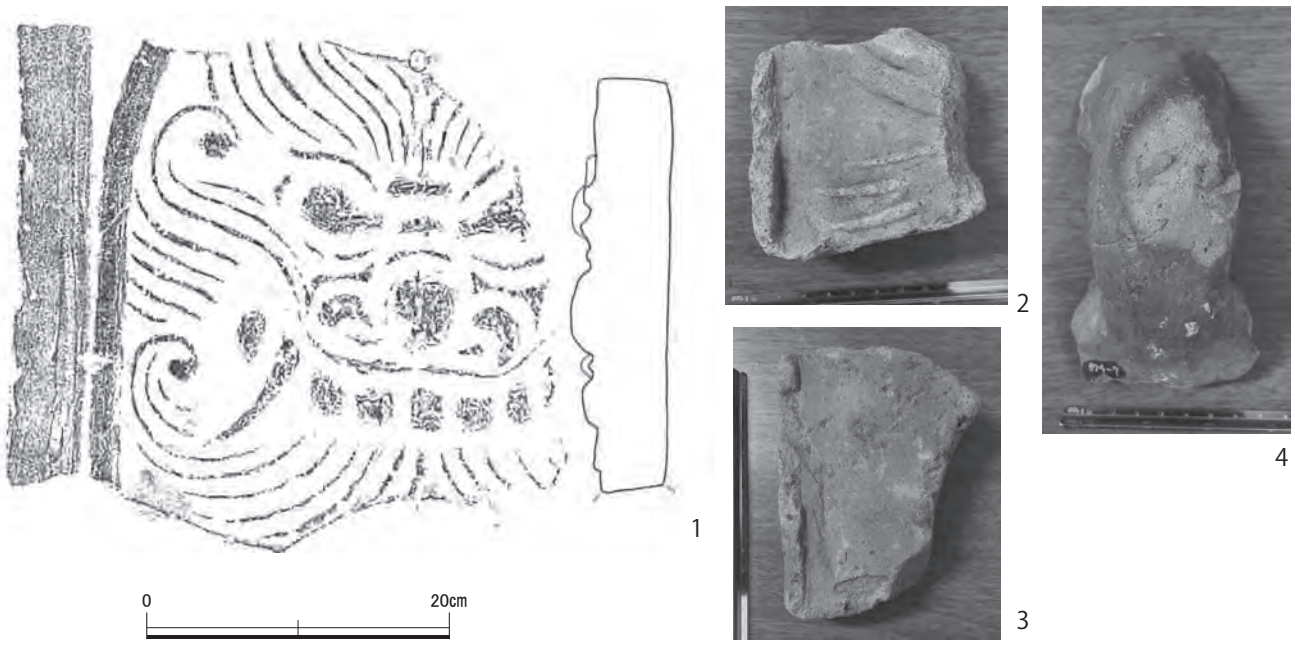
第２図　武蔵国分寺出土鬼瓦（Ⅰ：５）



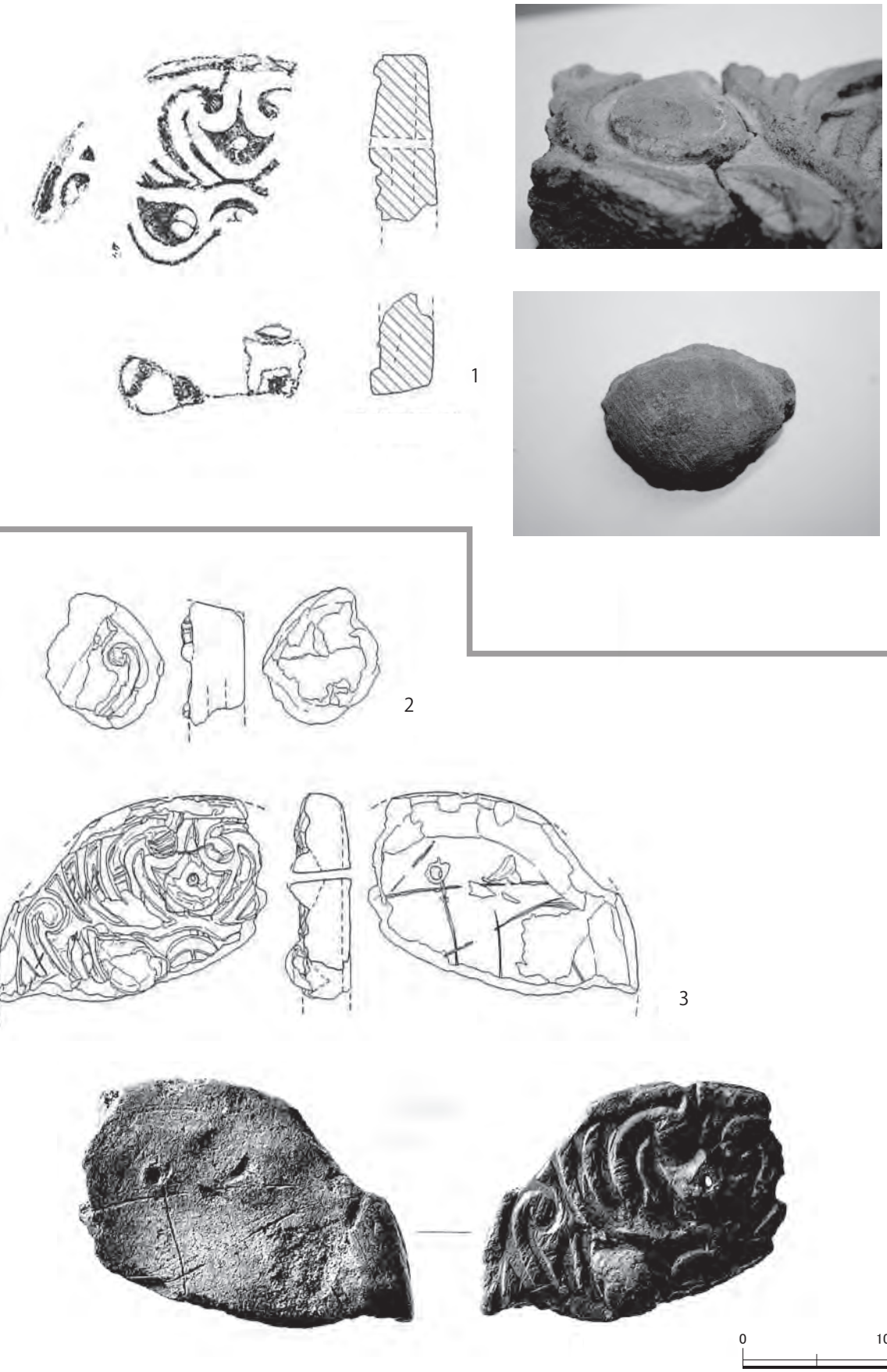
第３図　新沼窯・中堀遺跡・大寺廃寺出土鬼瓦（１：６）



第４図　宗元寺　鬼瓦（１：５）

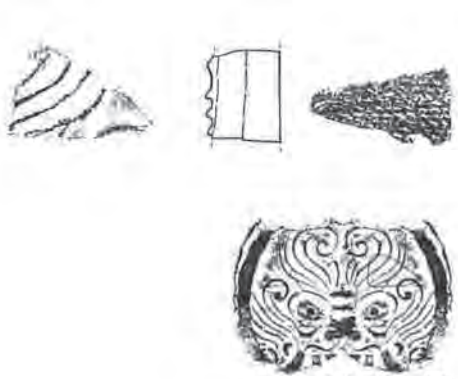


第５図　千代廃寺　鬼瓦（１：４　写真は縮尺任意）

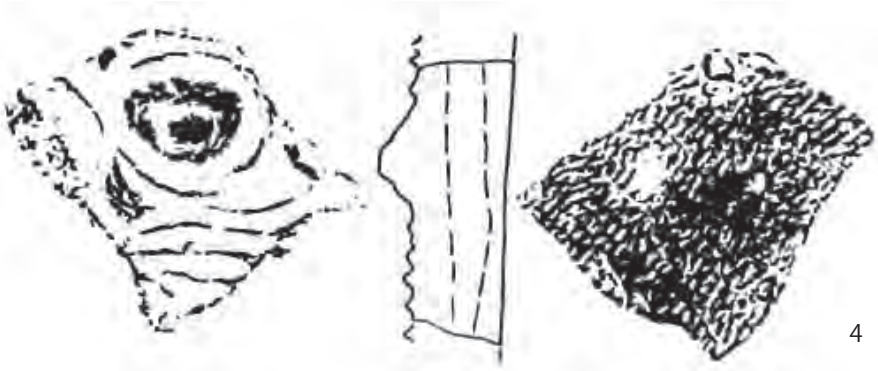


第６図　下寺尾廃寺出土鬼瓦（１：４　写真は縮尺任意）

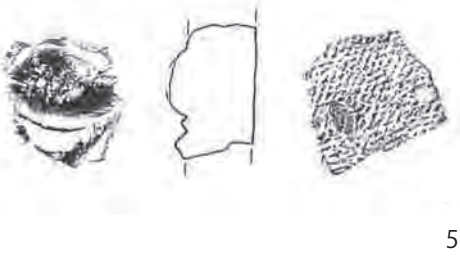


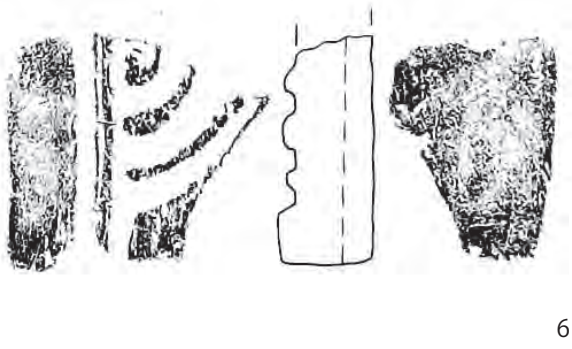


僧寺出土鬼瓦復元図
（拓影）

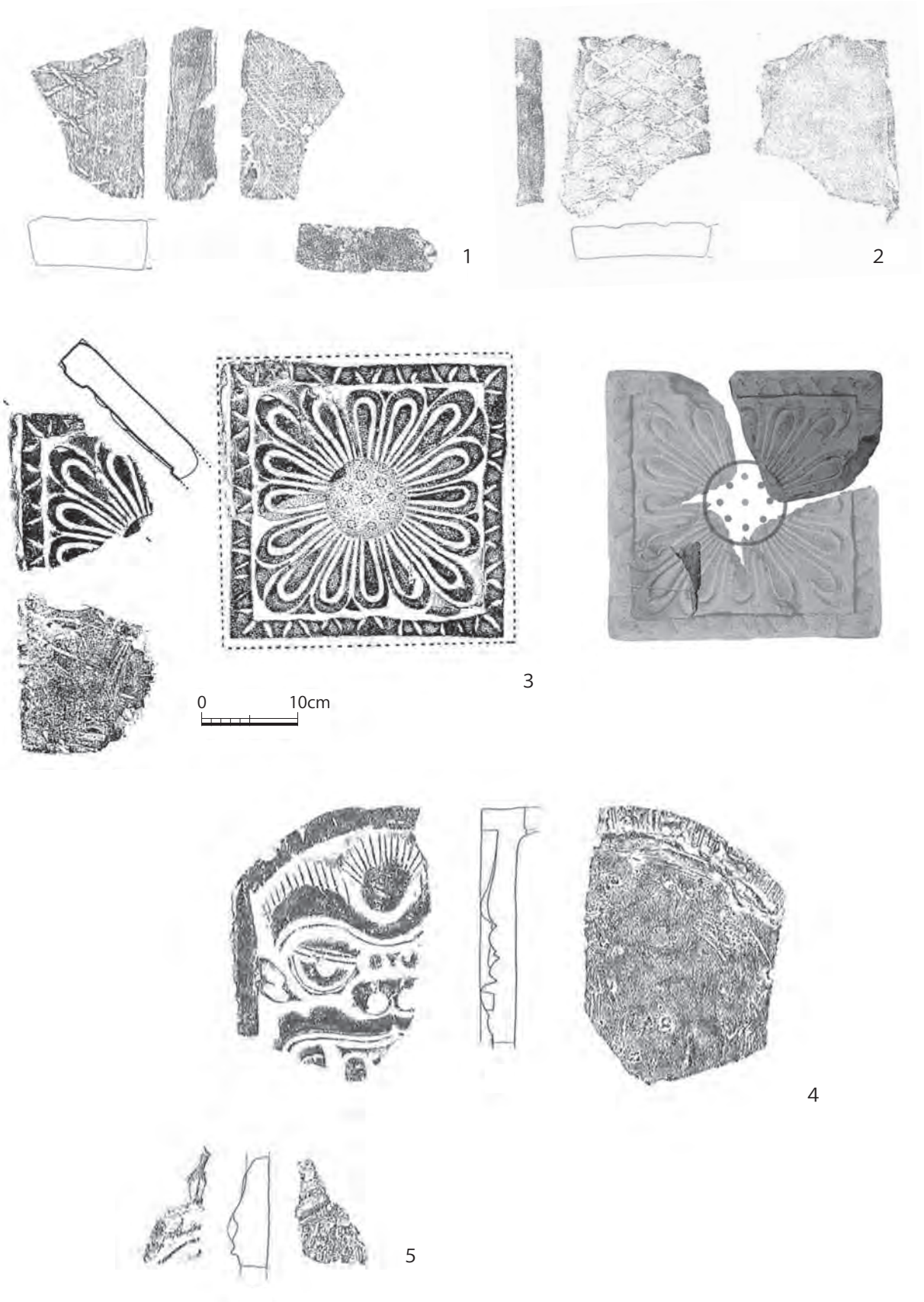








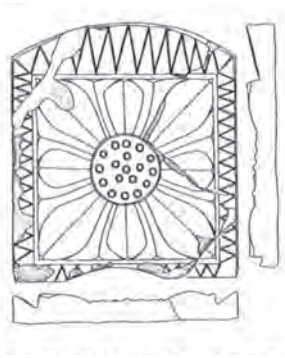
第７図　相模国分僧寺・尼寺出土鬼瓦（１：４）



第８図　茨城県出土鬼瓦（１：６）

栃木県内鬼瓦の種類

蓮華文鬼瓦



下野薬師堂跡（下野市）

鬼面文鬼瓦



下野国分寺跡（下野市）
鬼瓦１型式



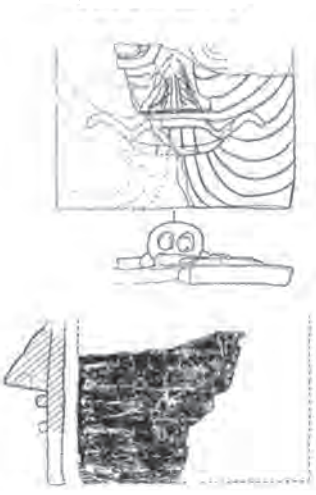
鬼瓦２型式



鬼瓦３型式

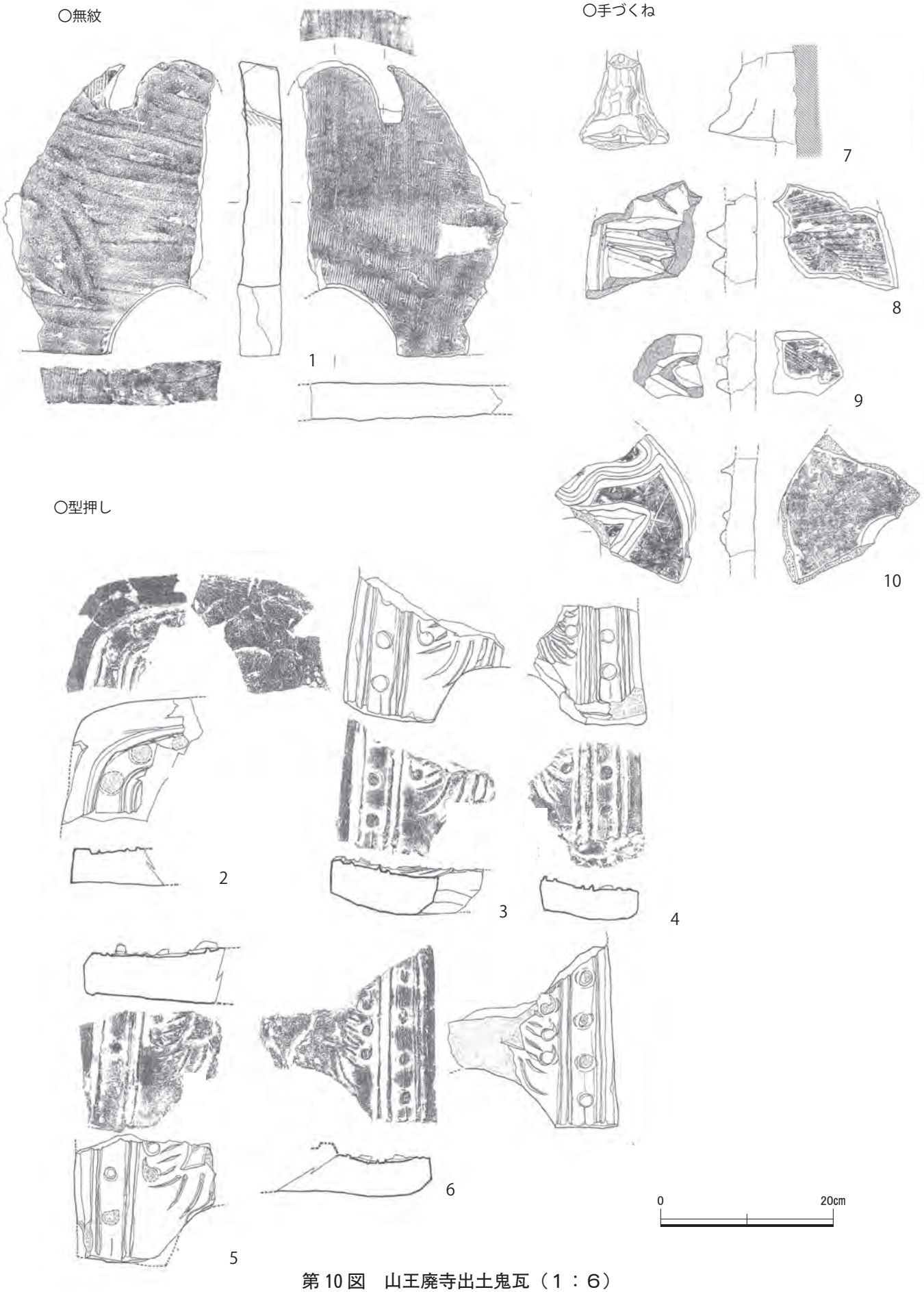


般若廃寺 (佐野市)

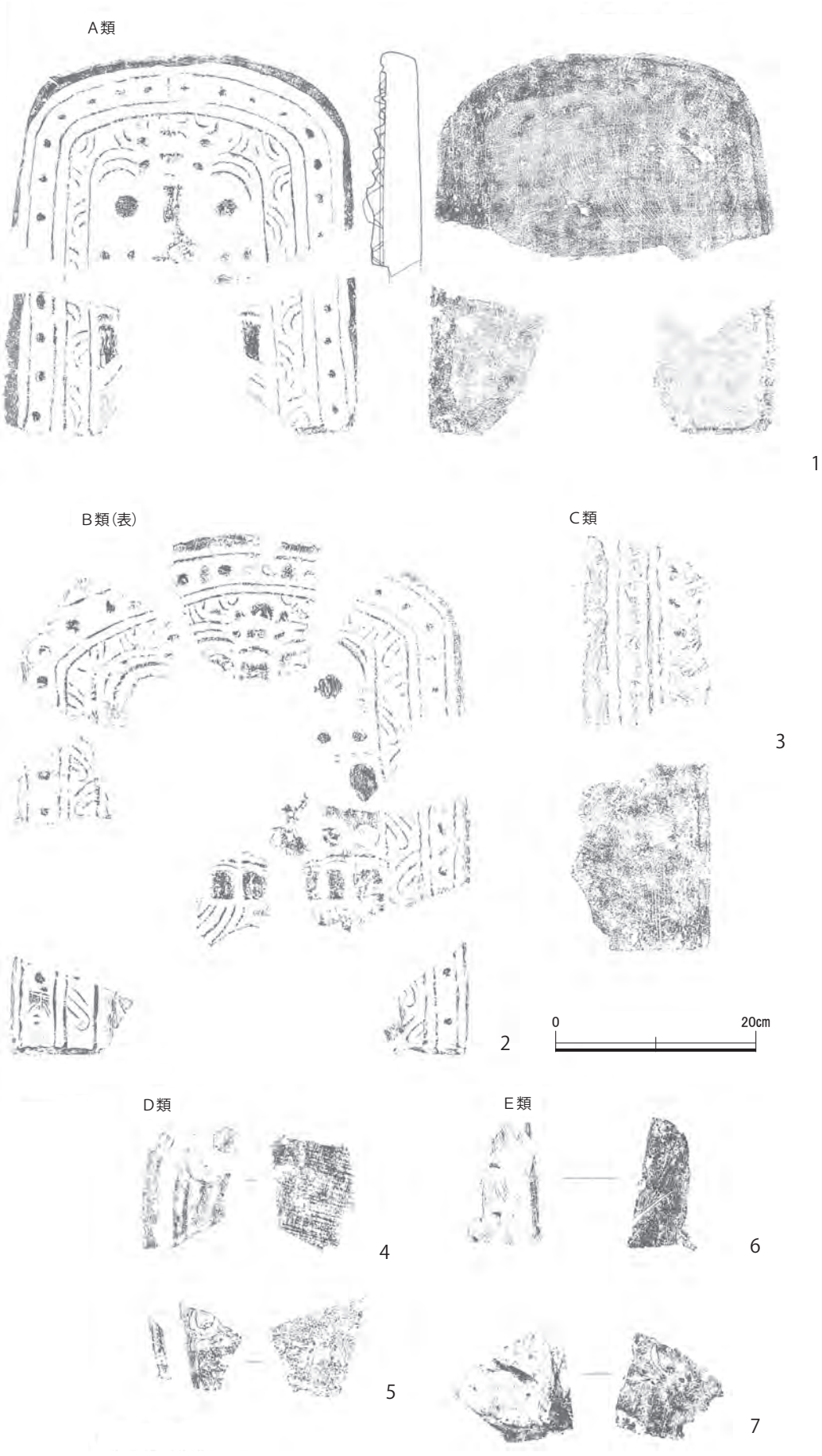


東光寺裏山窯跡 (足利市)

第９図　栃木県内出土鬼瓦（縮尺任意）



第 10 図　山王廃寺出土鬼瓦（１：６）



第 11 図　上野国分寺出土鬼瓦（１：６）